

図 2

3) 女性 DMP 患者に関する研究 (2) — 厚生省資料による統計的検討 —

国立新潟療養所

片桐 忠 湯浅 龍彦 川瀬 康裕
 熊本 俊秀 文田 明仙 高沢 直之
 桜川 宣夫

昨年、我々は女性の DMP 患者で、臨床的に Duchenne 型に類似する 2 症例につき報告した。

今回は全国レベルでどの位の頻度同様の症例が存在するかを究明するために、昭和 50 年度厚生省資料を基に解析を行なった。資料の分類に基いた各型の総数ならびにその頻度は表 1 の如くで、女性 Duchenne 型と診断してあるのは 29 例あった。しかしこれらの中には処女歩行が認められない例、経過が長すぎると思われる例などが含まれており、各施設により多少、診断基準が異なっていると思われるので一応 229 例の女性全例を分析の対象とした。まず Duchenne 型の診断基準を設定する意味で男児例の歩行不能例をみると 10 才をピークに次いで 9 才、11 才、12 才の順となり、それらで全体の 72% を占める (図 1)。次に L-G 型で既に歩行不能となっている例をみると図 2 の如くで、その分布は広汎にわたっている。それらの中で 10 才前後で歩行不能となっている例を一応、対象の範囲に入れて以下の分析に供した。

CPK値は各施設により異なり最高値でみると500単位から6,000単位と差がある。しかしCPK値を年齢別にプロットしてみるとどの施設においてもほぼ類似するパターンを示した。以上のことからDuchenne型の診断基準として、1) 歩行獲得があり、2) 5才頃迄で発病し、3) 6~12才頃迄に歩行不能となり、4) 20~25才迄にbed riddenに陥り、5) CPK値に上昇が認められる。の5項目を設けた。その基準に従って、表1の女性DMP患者の中からその診断基準を満たすものを抽出したものが、表2である。その結果、今回の資料から約36例のDuchenne型類似の女児が存在することが判明した。結局、それらを含めた全Duchenne型の中で女性の占める割合は約3.2%となり、1973年に近藤等が報告した値3.7%にほぼ類似する値が得られた。

表1 DMP各型の総数および頻度

	Male	Female		%
Duchenne	1087	29	1116	70.3
Becker	13	1	14	0.9
LG	53	43	96	6.0
FSH	13	9	22	1.4
miscellaneous	82	52	134	8.4
non DMP	95	78	173	10.9
not determined	16	17	33	2.1
total	1,359	229	1,588	100

(昭和50年度厚生省資料)

図1 Duchenne型の歩行不能年齢

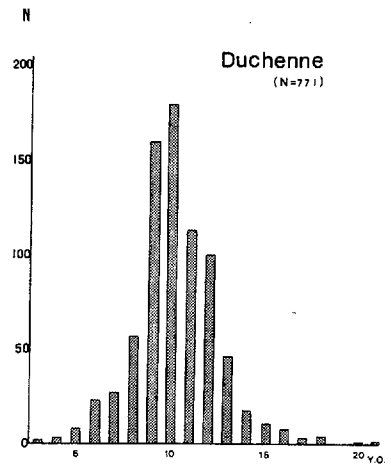


図2 Limb girdle型の歩行不能年齢

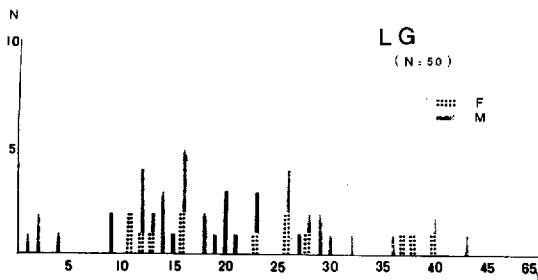


表2 全女性DMP患者中Duchenne型の診断基準を満たす患者数

Duchenne	29	14
LG	43	2
FSH	9	2
miscellaneous	52	12
not determined	17	6
	150	36

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

昨年、我々は女性の DMP 患者で、臨床的に Duchenne 型に類似する 2 症例につき報告した。今回は全国レベルでどの位の頻度同様の症例が存在するかを究明するために、昭和 50 年度厚生省資料を基に解析を行なった。資料の分類に基づいた各型の総数ならびにその頻度は表 1 の如くで、女性 Duchenne 型と診断してあるのは 29 例あった。